

佐藤卓さんと4市長の対談

シンポジウム開催前に、佐藤卓さんと4市長による対談を行いました。

司会者 シンポジウムのテーマは「多様性の統合により、世界に類を見ない地域を創造する。」です。まずは8年ほど前からこの地域の地方創生に向けて一緒に歩んできた佐藤卓さんから熱い想いをお話いただきます。

佐藤 デザインを通じて、地域の皆さんと一緒にセラミックバレーを長く育てていきたいと思っています。世界から見ても、この産地はとても素晴らしく、新しい世代の人たちとこの地を盛り上げていきたいです。コロナ禍で厳しい状況ですが、この財産を未来に向けてつなげていく、世界から見ればこの地は一つ、セラミックバレーと名付けることは、世界に発信する点で大きな意義があります。

古川市長 セラミックバレーの取り組みとして、今回は第2波だと捉えています。第1波においては行政主導により当事者不在となった、このことを反省点とし、今回の第2波は民間主導による若い経営者の力で推進されています。その根底にある4市の横串は伝統と文化です。この伝統と文化の象徴が可児市にある荒川豊蔵資料館です。

水野市長 陶磁器産業は歴史・文化そして芸術など伝統の中で育まれました。この1300年の伝統を生かし、伝統産業だけで終わらせないよう地場の基幹産業として大切にしながら未来に向かう時です。メーカーや商社だけではなく、周辺のさまざまな人や物があつての陶磁器産業です。地域全体の多くの人や物が交わりつながらることを期待しています。

佐藤 素晴らしい考え方ですね。コロナが落ち着いた後には、世界の旅行者がこの産地にも訪れます。やきものの産地としての財産を生かしながら、さまざまな人や物がつながり、素敵な宿・おいしい料理・安らげる湯など総合的な力で魅力を伝えることが望まれます。

加藤市長 セラミックバレーは世界戦略として海外を意識した活動、その中で国際陶磁器フェスティバルがあります。「何でもできるが何もできない」多様性とならないような取り組みが大切です。担い手も多様であり求めていることは同じでも考え方が違っている、今までは議論する場がなかったので、今回のシンポジウムは有意義と感じます。これまでの蓄積・良さを生かし、誇りに思えるような活動になればと思います。

佐藤 美濃焼は日常の生活食器から人間国宝の手による茶碗まであり、美濃焼と聞いて1つの物を思い浮かべることは難しい、それぞれが世界に類を見ない大き

な個性です。地元の人は当たり前過ぎて気付いていない魅力です。このことをポジティブに捉え豊かな地域としてモチベーションをつなげている、それぞれの分野で脈々と技術が受け継がれている人財を育てることが出来る素晴らしい地域なのです。

富田市長 可児市は地場産業ではなく陶芸の地。市民の7~8割は外から来た人なので、可児に日本人特有の美意識を感じさせる桃山陶の地があることを知らない。子どもの頃から歴史や文化を伝えることで、まちを誇りに思い世界に通じる人財を育てていきたいと考えています。

佐藤 この産地を世界に向けて発信するには、1つになっていくことが必要です。私も子どもの教育はすごく大事だと思い、NHKの子ども番組づくりに携わっています。身の回りのすべてがデザインだと考えると、美濃焼は器など日常にあるデザインの基礎・象徴です。見えない宝が山ほどあるこの地、子どもたちも知っているようで知らないことに気付くことで、自分たちのまちを誇りに思うようになるでしょう。

水野市長 業界は世代交代してきていて、新しい事業展開を考えています。そんな若い世代にまちづくりに参加してもらうことで、20年30年経ったまちを使う人たちに、今まちをつくってもらわなければならないと考えています。進めるのはやはり人です。

佐藤 つながりがとても大切で、それぞれのまちに熱い想いをもっている若い世代が必ずいるはずですよ。

加藤市長 このセラミックバレーの取り組みを機会として「やっているのかな」と思っている人たちが動ききっかけになればと思います。

富田市長 がんばっている若い陶芸家も応援していきたいと考えています。生活の中で良質な器に触れることができるようなまちは、豊かなまちとなります。

古川市長 この「民間主導」の活動を各市長は同じ思いで、みんなで一緒に取り組みます。先人たちの素晴らしい財産を生かし若い世代が新しい道を切り開いていく、まさしく「温故知新」です。未来の子どもたちがまちに誇りを持ち、誰もがしがあわせを感じる、そんな仕組みが見えてきたと感じています。今日の朝日のようですね。

佐藤 改めて地域が一つとなって世界に発信するきっかけになることを期待しています。皆さんありがとうございました。

CERAMIC VALLEY Mino Japan オフィシャルムービーはこちら

